# 熊本県本土南部・鹿児島県本土北西部方言の動詞テ形における形態音韻現象

有　元　光　彦

Morphophonological Phenomenon of the *Te*-form Verbs in the Southern Mainland Dialects of Kumamoto Prefecture and the North-Western Mainland Dialects of Kagoshima Prefecture

ARIMOTO Mitsuhiko

(Received September 24, 2010)

## 0．はじめに[1]

本稿の目的は，熊本県本土南部方言及び鹿児島県本土北西部方言を対象とし，動詞テ形のデータを挙げるとともに，そこに起こる特異な形態音韻現象を記述することにある。

この特異な形態音韻現象とは，有元光彦（2007a, 2007b, 2007c）等で言うところの「テ形（音韻）現象」である。有元光彦（2007c）によると，テ形現象は次のように定義されている。

(1)テ形現象：

動詞テ形において，共通語の「テ」「デ」に相当する部分が，動詞の種類（語幹末分節音の違い）によって，様々な音声で現れる形態音韻現象。

例えば，ある方言Δにおいて，＜書いてきた＞を［kakkita］というように，共通語の「テ」に相当する部分にいわゆる促音が現れるとする。一方，＜取ってきた＞は*［tokkita］とは言えず，［tottekita］という［te］が現れる形しか存在しないとする。このように，動詞の種類の違いによって，「テ」「デ」に相当する部分の分布に偏りがある場合，方言Δはテ形現象を持つと言う。[2]

本稿では，熊本県本土南部方言・鹿児島県本土北西部方言にも周辺地域と同様にテ形現象が存在するかどうか，存在するとしたらどのタイプを示すか，さらにこのタイプが周辺地域のテ形現象のタイプとどのような関連性があるか，について分析する。

---

[1] 本稿の一部は，平成16～18年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究（C）(2)「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」（研究代表者：有元光彦・No.16520281），及び平成19～21年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・挑戦的萌芽研究「方言研究における構成的アプローチの構築」（研究代表者：有元光彦・No.19652041）によるものである。フィールドワークにおいては，熊本県津奈木町・人吉市・五木村及び鹿児島県阿久根市の各教育委員会及びインフォーマントの方々に大変お世話になった。記して感謝する次第である。

[2] 共通語においても，動詞の種類によって，当該部分に「テ」が現れるか「デ」が現れるかの違いがあるので，共通語もテ形現象を持っていることになる。従って，テ形現象はすべての方言に存在することになるが，そうであるからと言って，テ形現象の存在意義がなくなるわけではない。

## 1．方法論

本稿では，初期の生成音韻論（Generative Phonology）の枠組みを利用する。この枠組みでは，基底形（underlying form）に音韻ルール（phonological rule）が線的（linear）に適用されることによって，音声形（phonetic form）が派生される。[3] 基底形は，心内辞書（mental lexicon）に登録されている辞書項目（lexical item）が形態的操作によって組み合わされたものである。従って，活用形の１つであるテ形の語構成（基底形）は，「動詞語幹＋テ形接辞」となっている。

動詞語幹には次のようなものがある。

(2) a．子音語幹動詞：

/kaw/＜買う＞, /tob/＜飛ぶ＞, /jom/＜読む＞, /kas/＜貸す＞, /kak/＜書く＞, /kog/＜漕ぐ＞, /tor/＜取る＞, /kat/＜勝つ＞, /sin/＜死ぬ＞など

b．母音語幹動詞：

/mi/＜見る＞, /oki/＜起きる＞, /de/＜出る＞, /uke/＜受ける＞など

c．不規則語幹動詞：

/i/～/it/～/itate/＜行く＞[4], /ki/＜来る＞, /s/＜する＞

ここでは，テ形に使われる語幹のみを挙げている。子音語幹動詞・母音語幹動詞の各語幹は他の活用形でも共通して使われるが，語幹を複数持つ不規則語幹動詞では活用形によって異なる語幹が使用される。

テ形接辞は，本稿で扱う方言においてはすべて/te/である。3.1．で後述するように，津奈木町方言では［ko:ʧikita］＜買ってきた＞が現れているが，この場合の［ʧi］の基底形は/ti/である。また，テ形接辞の直後には様々な単語が続く。例えば，［kita］＜（～て）きた＞，［mire］～［miro］＜（～て）みろ＞，［kure］＜（～て）くれ＞等である。

## 2．データ属性

本稿で挙げたデータは，平成20（2008）年９月のフィールドワークによって収集されたものである。収集した地域は，熊本県葦北郡津奈木町，人吉市，球磨郡五木村，及び鹿児島県阿久根市である。

秋山正次（1983）によると，熊本県方言は「熊本北部方言」と「熊本南部方言」に大きく分類される。前者はさらに２つに下位区分され，阿蘇郡（現阿蘇市近辺）・上益城郡の東北部方言（熊本東部方言）とそれ以外の地域（熊本北部方言）に分類されている。また，後者は，より詳細な観点から言えば，球磨方言，天草方言，及び八代・葦北方言の３つに下位区分されている。この方言区画に従えば，本稿で扱う４地域の方言は，すべて「熊本南部方言」に分類されている。

データは音声記号によって表記する。データの適格性については，各音声形の直前に以下のような記号を付けて示す。即ち，記号*はその音声形が不適格であることを，記号%はその音声形の方をよく使うとインフォーマントが判断していることをそれぞれ表す。記号&はインフォーマントが聞いたことがあると回答していることを表す。また，記号----は調査漏れであ

---

[3] 以下，基底形は記号/ /で，音声形は記号［ ］でそれぞれ括る。

[4] /itate/は，語幹末分節音が/e/で終わるので，下一段動詞（母音語幹動詞）であるが，便宜上ここに並べておく。

ることを表す。

また，本稿では語幹末分節音（stem-final segment）が $a$ である動詞を「$a$ 語幹動詞」と呼ぶ。例えば，語幹末分節音が/k/である動詞，/kak/＜書く＞は「k語幹動詞」と呼ぶ。「$i_1$，$e_1$語幹動詞」は，語幹が１音節であるi, e語幹動詞を，「$i_2$，$e_2$語幹動詞」は，語幹が２音節以上のi, e語幹動詞をそれぞれ表す（インデックス番号が付いていない場合は両方を含む）。

## ３．分析

本節では，各方言のデータを挙げつつ，テ形現象のタイプを考察していく。[5]

本節で挙げるデータ表では，方言形のみを音声記号で表記する。表の左端列に挙げていない語幹が使われる場合には，その都度注で説明する。

### ３．１．津奈木町方言

本節では，津奈木町方言のテ形現象について記述する。【表１】に動詞テ形のデータを挙げる。

**【表１】　津奈木町方言の動詞テ形**

| 語　幹 | 福　浜 | 岩　城 | 意　味 |
|---|---|---|---|
| kaw＜買う＞ | ko:ʧikita<br>kokkita | kokkita<br>ko:ʧikita | 買ってきた |
| tob＜飛ぶ＞ | tokkita | todekita<br>*tokkita<br>*toʧikita<br>*todʒikita | 飛んできた |
| jom＜読む＞ | jokkita | jodekita<br>*jokkita | 読んできた |
| kas＜貸す＞ | kjakkita | kja:kaʃitekita<br>kja:tekita<br>?kjakkita | 貸してきた |
| kak＜書く＞ | kjakkita | kja:tekita<br>kja'kkita | 書いてきた |
| kog＜漕ぐ＞ | koidekita<br>*kokkita | koidekita<br>kokkita | 漕いできた |
| oeg＜泳ぐ＞ | ojekkita | oekkita | 泳いできた |
| tor＜取る＞ | tottekita | tottekita<br>*tokkita | 取ってきた |
| kat＜勝つ＞ | kattekita<br>*kakkita | kattekita | 勝ってきた |
| sin＜死ぬ＞ | itʃindemiro | itʃindemiro | 死んでくれ |

[5] 各方言のデータ，及びそれに関する簡単な考察については，すでに有元光彦（2010b:30-37）に記してある。

| | | | |
|---|---|---|---|
| mi＜見る＞ | mitekita<br>?mikkita | mitekita<br>*mikkita | 見てきた |
| oki＜起きる＞ | okittekita<br>*okikkita | okikkita | 起きてきた |
| de＜出る＞ | dekkita | detekita<br>dekkita | 出てきた |
| uke＜受ける＞ | ukekkita<br>uketʃikita | ukekkita | 受けてきた |
| i～it～itate＜行く＞ | itakkita | itakkita | 行ってきた |
| ki＜来る＞ | kitemiŋka | kiteminna | 来てみないか |
| s＜する＞ | ʃitekita<br>*ʃikkita<br>*setekita | ʃitekita<br>*ʃikkita<br>*setekita | してきた |

【表１】を見ると，津奈木町方言は真性テ形現象方言（タイプTB方言）であることが分かる。さらに，［ko:ʧikita］＜買ってきた＞，［uketʃikita］＜受けてきた＞という形式が現れていることから，何らかの別の方言タイプと“共生”している可能性がある。近隣の上天草市維和方言の例から考慮すると，それは擬似テ形現象方言（タイプPA方言）である確率が高い。ただし，w, $e_2$語幹動詞にしか現れていないため，すでに崩壊し，消滅寸前であると考えられる。もしそうであるとすると，w, $e_2$語幹動詞が最も消滅しにくい種類であるということになる。

次に，一段動詞の否定形・過去形を挙げておく。

**【表２】**

| | 福　浜 | | 岩　城 | |
|---|---|---|---|---|
| | 否定形 | 過去形 | 否定形 | 過去形 |
| 見る | miN<br>%miraN | mita<br>*mitta | miN<br>%miraN | mita<br>*mitta |
| 起きる | okiN<br>okiraN | okitta | %okiN<br>okiraN | okita<br>okitta |
| 出る | deN<br>deraN | deta<br>*detta | deN<br>%deraN | deta<br>*detta |
| 受ける | ukeN<br>*ukeraN | uketa<br>*uketta | ukeN<br>*ukeraN | uketa<br>*uketta |

【表２】から，r語幹化は$i_1$語幹動詞で起こりやすいと考えられる。従って，テ形現象において，r語幹化した$i_1$語幹動詞はr語幹動詞と同様に振る舞う。

### 3．2．人吉市方言

本節では，人吉市方言のテ形現象について記述する。【表３】に動詞テ形のデータを挙げる。

**【表３】　人吉市方言の動詞テ形**

| 語　幹 | 田野町 | 田　町 | 意　味 |
|---|---|---|---|
| kaw＜買う＞ | ko:tekita<br>*ko:ʧikita<br>*kokkita | ko:tekita<br>*kokkita | 買ってきた |
| tob＜飛ぶ＞ | to:dekita<br>tsu:dekita | to:dekita | 飛んできた |
| jom＜読む＞ | jo:dekita | jo:demiraɴja | 読んできた |
| kas＜貸す＞ | kaʃitekita<br>*ke:tekita | kja:tekita | 貸してきた |
| okos＜起こす＞ | okoʃitekita<br>oketekita | ----- | 起こしてきた |
| kak＜書く＞ | kja:tekita | kja:tekita | 書いてきた |
| kog＜漕ぐ＞ | ke:dekita | ke:dekita | 漕いできた |
| oeg＜泳ぐ＞ | oedekita | ----- | 泳いできた |
| tor＜取る＞ | tottekita | tottekita | 取ってきた |
| kat＜勝つ＞ | kattekita | kattekita | 勝ってきた |
| sin＜死ぬ＞ | ʃindekurureba | ?ʃindekure | 死んでくれ |
| mi＜見る＞ | mitekita<br>*mittekita | mitekita<br>*mittekita<br>*mikkita | 見てきた |
| oki＜起きる＞ | okitekita<br>okittekita | okitekita<br>okittekita<br>*okikkita | 起きてきた |
| de＜出る＞ | detekita<br>*dekkita | detekita<br>*dettekita<br>*dekkita | 出てきた |
| uke＜受ける＞ | uketekita<br>ukekkita | uketekita<br>*ukettekita<br>*ukekkita | 受けてきた |
| i～it～itate＜行く＞ | ittekita<br>itakkita | itakkita | 行ってきた |
| ki＜来る＞ | kitennai | kitemitenno | 来てみろ |
| s＜する＞ | ʃitekita<br>*ʃikkita<br>*sekkita | ʃitekita | してきた |

【表3】を見る限りでは，人吉市方言は非テ形現象方言（タイプN方言）である。ただし，田野町方言では，$e_2$語幹動詞で［ukekkita］<受けてきた>の形式が現れているので，真性テ形現象方言（タイプTG方言）の可能性も残している。

次に，一段動詞の否定形・過去形を挙げておく。

**【表4】**

| | 田野町 | | 田　町 | |
|---|---|---|---|---|
| | 否定形 | 過去形 | 否定形 | 過去形 |
| 見る | *miN<br>miraN | mita<br>*mitta | *miN<br>miraN | mita<br>*mitta |
| 起きる | *okiN<br>okiraN | okitta | *okiN<br>okiraN | okitta |
| 出る | *deN<br>deraN | deta<br>*detta | *deN<br>deraN | deta<br>*detta |
| 受ける | ukeN<br>*ukeraN | uketa<br>*uketta | ukeN<br>*ukeraN | uketa<br>*uketta |

【表4】から分かるように，$e_2$語幹動詞以外の動詞ではr語幹化が進行していると言えよう。従って，テ形現象において，$i_1$, $i_2$, $e_1$語幹動詞はr語幹動詞と同様に振る舞う。

### 3．3．五木村方言

本節では，五木村方言のテ形現象について記述する。【表5】に動詞テ形のデータを挙げる。表の最初の行にあるA, Bは別の個人を表している。また，(f) は女性，(m) は男性をそれぞれ表す。

**【表5】　五木村方言の動詞テ形**

| 語　幹 | A (f) | B (m) | 意　味 |
|---|---|---|---|
| kaw<買う> | ko(:)tekita<br>*ko:ʧikita[6]<br>*kokkita | ko:tekita<br>*kokkita | 買ってきた |
| tob<飛ぶ> | mo:tekita[7]<br>*mo:ʧikita[8] | tondekita | 飛んできた |
| asob<遊ぶ> | asodekita<br>*asoʤikita[9] | asondekita<br>*asodekita<br>*asudekita | 遊んできた |

[6] インフォーマントによると，古い言い方とのことである。
[7] 語幹は/maw/〈舞う〉の可能性があるが，確認していない。
[8] インフォーマントによると，古い言い方とのことである。
[9] インフォーマントによると，聞いたことがあるとのことである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| jom＜読む＞ | jo:dekita | jondekita<br>jo:dekita | 読んできた |
| ogam＜拝む＞ | ogodekita | ----- | 拝んできた |
| kas＜貸す＞ | kaʃitekita<br>kja:tekita | kja:tekita | 貸してきた |
| kak＜書く＞ | kja:tekita | kja:tekita | 書いてきた |
| kog＜漕ぐ＞ | koidekita<br>*ke:dekita[10] | koidekita<br>*ke:dekita | 漕いできた |
| tor＜取る＞ | tottekita | tottekita | 取ってきた |
| kat＜勝つ＞ | kattekita | kattekita | 勝ってきた |
| sin＜死ぬ＞ | uttʃindekure | uttʃindekureŋkana | 死んでくれ |
| mi＜見る＞ | mitekita<br>*mittekita | mitekita<br>*mittekita | 見てきた |
| oki＜起きる＞ | okitekita<br>okittekita | okitekita<br>*okittekita | 起きてきた |
| de＜出る＞ | detekita<br>*dettekita | detekita<br>*dettekita | 出てきた |
| uke＜受ける＞ | uketekita<br>*ukettekita<br>*ukekkita[11] | uketekita<br>*ukettekita | 受けてきた |
| i～it～itate＜行く＞ | itatekita<br>itakkita | itekita<br>ittekita<br>*itatekita | 行ってきた |
| ki＜来る＞ | kitemiro | ----- | 来てみろ |
| s＜する＞ | ʃitekita | ʃitekita | してきた |

【表５】を見ると，五木村方言は基本的に非テ形現象方言（タイプN方言）であることが分かる。ただ，A氏によると，［ko:tʃikita］＜買ってきた＞，［ukekkita］＜受けてきた＞が古い形との認識があることから，さらに古い世代では，これらの形式が使用されていた可能性がある。

次に，一段動詞の否定形・過去形を挙げておく。

[10] インフォーマントによると，古い言い方とのことである。
[11] インフォーマントによると，古い言い方とのことである。

**【表6】**

| | A (f) | | B (m) | |
|---|---|---|---|---|
| | 否定形 | 過去形 | 否定形 | 過去形 |
| 見る | miN<br>miraN | mita<br>*mitta | miN<br>miraN | mita<br>*mitta |
| 起きる | okiN<br>okiraN | okita<br>okitta | okiN<br>okiraN | okita<br>*okitta |
| 出る | deN<br>deraN | deta<br>*detta | deN<br>deraN | deta<br>*detta |
| 受ける | ukeN<br>*ukeraN | uketa<br>uketta | ukeN<br>*ukeraN | uketa<br>*uketta |

【表6】を見ると，すべての一段動詞であまりr語幹化は進行していないようである。従って，テ形現象において，r語幹化は決定的なキーにはなっていないと考えられる。

### 3．4．阿久根市方言

本節では，阿久根市方言のテ形現象について記述する。【表7】に動詞テ形のデータを挙げる。

**【表7】　阿久根市方言の動詞テ形**

| 語　幹 | A (m) | B (f) | 意　味 |
|---|---|---|---|
| kaw＜買う＞ | kodekida<br>*kokkida | kodekida<br>*kokkida | 買ってきた |
| tob＜飛ぶ＞ | tondekida<br>*todekida | tondekida | 飛んできた |
| asob＜遊ぶ＞ | asudekida | ---- | 遊んできた |
| jom＜読む＞ | jodekida | jondekida<br>*jodekida | 読んできた |
| kas＜貸す＞ | kasedekida | kasekkida | 貸してきた |
| okos＜起こす＞ | ogedekida | ogosedekida<br>ogosekkida | 起こしてきた |
| kak＜書く＞ | kedekida | kedekida<br>*kekkida | 書いてきた |
| kog＜漕ぐ＞ | kedekida | koidekida<br>kedekida | 漕いできた |
| oeg＜泳ぐ＞ | oedekida | oedekida<br>oekkida | 泳いできた |
| tor＜取る＞ | tottekida | tottekida | 取ってきた |
| kat＜勝つ＞ | kattekida | kattekida | 勝ってきた |
| sin＜死ぬ＞ | ʃindemire | ʃindekure | 死んでくれ |

| | | | |
|---|---|---|---|
| mi<見る> | midekida<br>*mikkida | mitekida<br>*mittekida<br>*mikkida | 見てきた |
| oki<起きる> | ogittekida<br>*ogikkida | ogikkida | 起きてきた |
| de<出る> | dedekida<br>*dekkida | dedekida<br>*dekkida | 出てきた |
| uke<受ける> | ugedekida<br>*ugekkida | ugekkida | 受けてきた |
| i~it~itate<行く>[12] | idadekida | idakkida | 行ってきた |
| ki<来る> | kidemire | kidemireba | 来てみないか |
| s<する> | ʃitekida<br>*ʃikkida<br>*sekkida | ʃitekida<br>*ʃikkida<br>*sekkida | してきた |

【表7】から，阿久根市方言には，非テ形現象方言（タイプN方言）も真性テ形現象方言（タイプTG方言）も見られることが分かる。なお，本方言のs語幹動詞は，e語幹化しているようである。例えば，<貸す>，<起こす>はそれぞれ/kas/，/okos/ではなく，/kase/，/okose/となっている。

気になることは，B氏に[oekkida]<泳いできた>が現れていることである。ひょっとすると，語彙的には真性テ形現象方言（タイプTB方言）の名残があるのかもしれない。

次に，一段動詞の否定形・過去形を挙げておく。

**【表8】**

| | A（m） | | B（f） | |
|---|---|---|---|---|
| | 否定形 | 過去形 | 否定形 | 過去形 |
| 見る | *miN<br>miraN | mida<br>*mitta | *miN<br>miraN | mida<br>*mitta |
| 起きる | *ogiN<br>ogiraN | ogitta | *ogiN<br>ogiraN | ogida<br>*ogitta |
| 出る | *deN<br>deraN | deda | *deN<br>deraN | deda<br>*detta |
| 受ける | ugeN<br>*ugeraN | ugeda | ugeN<br>*ugeraN | ugeda<br>*ugetta |

【表8】から，$e_2$語幹動詞以外はr語幹化が進行していることが分かる。従って，テ形現象において，$e_2$語幹動詞以外の母音語幹動詞はr語幹動詞と同様に振る舞う。

[12] 本方言では，/itate/ではなく，/idade/を立てるべきかもしれない。

## 4．各方言の比較

本節では，本稿で扱った諸方言のテ形現象を比較する。まず，共通語の「テ」「デ」に相当する部分に現れる音声を【表９】にまとめる。ここで，記号Qはいわゆる促音を表す。記号 / は，その両端にある音声がいずれも現れる，即ちインフォーマントによって揺れがあることを表す。記号---は，/i/～/it/＜行く＞という語幹が存在しないことを表す。

**【表９】　共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声の比較**

| 語幹末分節音 | 津奈木町方言 | 人吉市方言 | 五木村方言 | 阿久根市方言 |
|---|---|---|---|---|
| w | Q/ ʧi | te | te | te |
| b | Q | de | de | de |
| m | Q | de | de | de |
| s | Q | te | te | te/Q |
| k | Q | te | te | te |
| g | Q | de | de | de/Q |
| r | te | te | te | te |
| t | te | te | te | te |
| n | de | de | de | de |
| $i_1$ | te | te | te | te |
| $i_2$ | te/Q | te | te | te/Q |
| $e_1$ | Q | te | te | te |
| $e_2$ | Q/ ʧi | te/Q | te | te/Q |
| i～it＜行く＞ | --- | te | te | te |
| ki＜来る＞ | te | te | te | te |
| s＜する＞ | te | te | te | te |

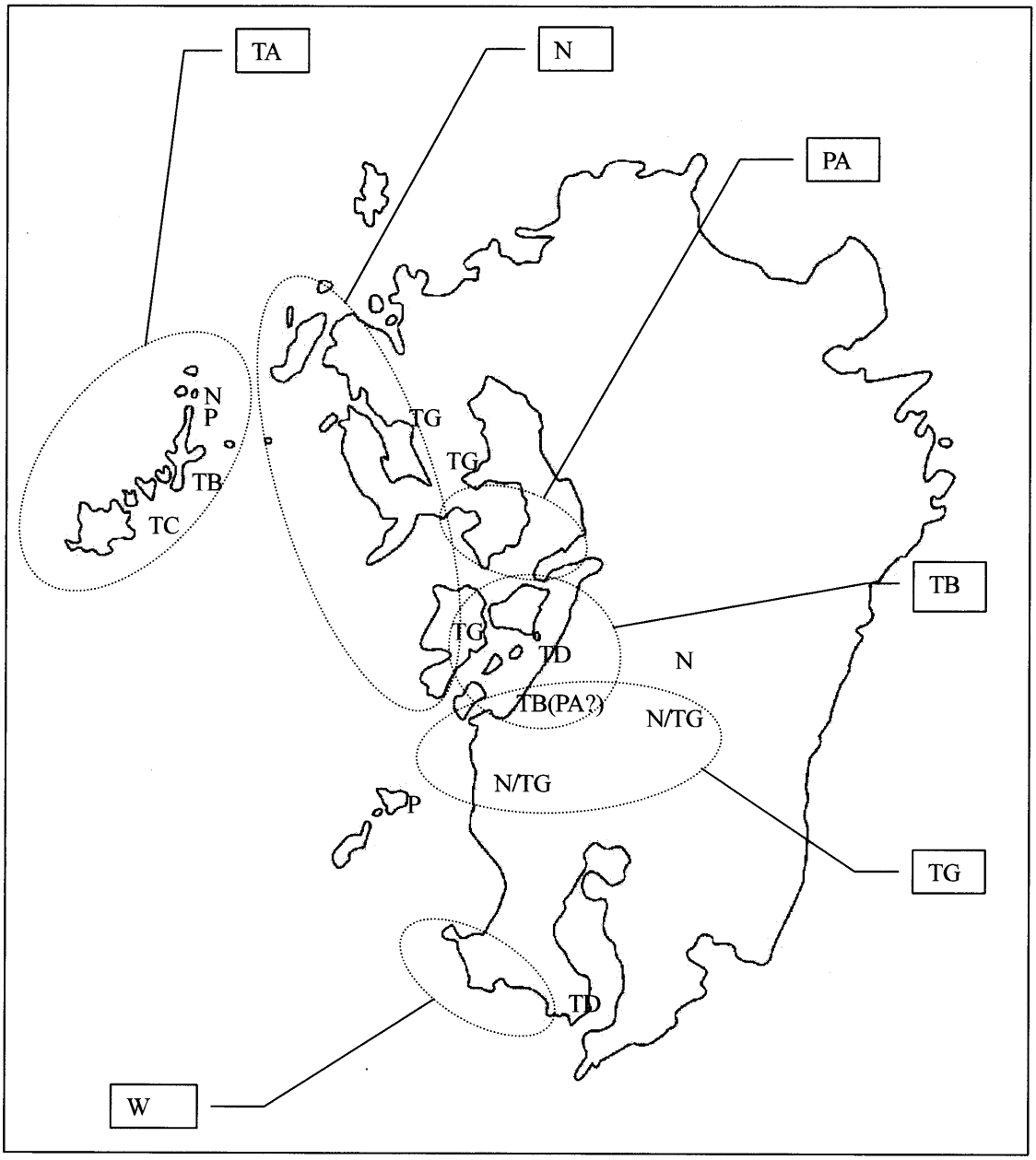
第３節の記述，及び【表９】から分かるように，津奈木町方言は真性テ形現象方言（タイプTB方言）である。人吉市方言及び阿久根市方言は，真性テ形現象方言（タイプTG方言）である。ただし，両者は非テ形現象方言（タイプN方言）であるとも考えられる。五木村方言は，非テ形現象方言（タイプN方言）である。

## 5．地理的分布

本節では，現時点までに得られたテ形現象の地理的問題を記述する。

テ形現象の地理的分布を【図１】に示す。これは，有元光彦（2010a:49）の【図２】に，本稿の記述を反映させたものである。

【図１】では，記号 / は両方の方言タイプが観察されたこと，記号（　）はその方言タイプの名残が見られることを，それぞれ表す。また，記号　？　は当該の方言タイプであるかどうか確定していないことを表す。




**【図１】　九州西部方言のテ形現象の地理的分布**

【図１】から分かることは，まずテ形現象として，熊本県本土南部では非テ形現象方言（タイプN方言）が現れているということである。さらに，このNは，人吉市方言及び阿久根市方言においてタイプTG方言と併存している。これは，有元光彦（2008a, 2009, 2010a）で述べた，NとTGとの地理的隣接の問題と同じである。従って，ここでは次のような通時的変化が考えられる。

(3)通時的変化： TG > N

このような通時的変化が内的な要因によるのか，それとも外的な要因（共通語タイプN）によるのかは不明である。共通語タイプNは，有元光彦（2007b:49）で仮定する生物学的なモデルの中で，テ形現象とは全く別次元のもの（「相転移」したもの）と考えており，「外来種」として位置付けている。ただ，その考えは早計であるかもしれない。なぜなら，内的要因によって変化した結果生じたNが，たまたま共通語タイプのNと同じであるだけかもしれないからである。長崎県本土西部にある非テ形現象方言Nと共通語タイプNが同じものなのかどうか慎重に検討する必要があるが，どうやれば証明できるかといった方法論上の問題もまだ残っている。

【図１】において次に分かることは，熊本県本土南部のNやTGの周辺に，Pが分布している点である。このような地理的分布は長崎県中南部にも見られる。有元光彦（2009）では，長崎県本土中南部における分布を観察することによって，次のような通時的変化を立てている。

(4)通時的変化： PA > TG > N

この考え方は，有元光彦（2007a）で仮定されている「非テ形現象化の指向性α」を否定するものである。「非テ形現象化の指向性α」とは，おおむね次のような通時的変化を示すものである。

(5)真性テ形現象方言＞擬似テ形現象方言，全体性テ形現象方言＞非テ形現象方言

(5)を見る限りでは，すべての真性テ形現象方言が擬似テ形現象方言に通時的に先行することを表しているが，これは(4)とは明らかに異なる主張である。しかし，(5)と同時に仮定され，その部分的な指向性を謳った「非テ形現象化の指向性β」は(4)を説明することができる。「非テ形現象化の指向性β」は次の通りである（cf. 有元光彦（2007a:219））。

(6)非テ形現象化の指向性β：
非テ形現象化は，それに関わる弁別素性の指定の数を減らす方向へと変化する。

この指向性は，言い換えれば，次のようにも規定できる。

(7)通時的変化は，均衡性の高いものから低いものへ変化する。

均衡性の度合いは，その一部が次のような仮説によって表される（cf. 有元光彦（2007a:184））。

(8)“均衡化”の仮説：
真性テ形現象・擬似テ形現象を引き起こす（音韻ルールの適用）環境は，［-syl, +cor, -cont］という集合で均衡化する。

コアルールであるe消去ルールの適用環境Xにおける均衡性の度合いは，XA=［-syl, +cor, -cont］が最も高く，XG=［-syl］はそれよりも均衡性が低いので，(7)により，PA>TGという

通時的変化が起こると説明できる。

ただ，前述した通り，(4)の場合もNの扱いが問題である。有元光彦（2007b）の生物学的モデルにおいては，Nは外来種であると考えているが，PAなどはどのように扱われているのだろうか。生物学的モデルでは，擬似テ形現象方言PAや全体性テ形現象方言Wは，真性テ形現象方言TAの擬態種と考えている（cf. 有元光彦（2007b:48-52））。ここでは，PAやWがある種の非テ形現象化を経てTAから派生したと考えるのではなく，初期の段階から擬態種が存在しており，TAとの言語接触を通してPAやWが生まれたと考えている。

どのような理論的なモデルが最適であるのか，今後さらなる検討を要するが，【図１】の示す地理的分布は非常に興味深いことであることには変わりがない。

## ６．まとめ

本稿では，熊本県本土南部方言及び鹿児島県本土北西部方言を取り上げ，そこに現れるテ形現象を記述した。ここでは，従来の調査で観察されたものと同様の地理的分布が発見され，通時的変化の解明に向けて，さらなるデータが蓄積されたものと考えられる。

ただ，通時的変化も含めてテ形現象の全体像を記述・説明するためには，どのような理論的モデルを選択するのかという問題については明らかになっていない。現時点では，記述の精度を高めていくしかないだろう。

## 【参照参考文献】

秋山正次（1983）「熊本県の方言」『講座方言学9　九州地方の方言』　飯豊毅一ほか編　国書刊行会

有元光彦（2005）「日本語の中の「九州方言」・世界の言語の中の「九州方言」⑤ことばの道－海の道－」『日本語学』　2005年9月号　明治書院　pp.74-82.

――――（2006）「長崎県島原半島方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢（山口大学教育学部）』　第56巻　第1部　pp.47-61.

――――（2007a）『九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象の研究』　ひつじ書房

――――（2007b）『方言研究の構成的アプローチの試み―九州方言の動詞テ形・タ形における形態音韻現象―』　平成16～18年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・基盤研究（C）(2)「九州方言における音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」（No.16520281，研究代表者：有元光彦）研究成果報告書

――――（2007c）「テ形音韻現象に対する構成的アプローチの試み」　九州方言研究会・第24回研究発表会（2007年7月7日）発表ハンドアウト

――――（2007d）「音韻論・生物学・構成的アプローチ―九州西部方言動詞テ形における形態音韻現象―」『社会言語科学会・第20回大会発表論文集』　社会言語科学会編　pp.190-193.

――――（2008a）「長崎県中北部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢（山口大学教育学部）』　第57巻　第1部　pp.1-13.

――――（2008b）「再訪：熊本県天草方言の動詞テ形における形態音韻現象」『言語の研究―ユーラシア諸言語からの視座―』（語学教育フォーラム　第16号）　大東文化大学語学教育研究所　pp.357-374.

――――（2009）「長崎県中南部本土方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢（山口

大学教育学部)』　第58巻　第1部　pp.15-31.
――― (2010a)「熊本県本土西部方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論叢（山口大学教育学部)』　第59巻　第1部　pp.35-52.
――― (2010b)『テ形音韻現象における構成的アプローチの試み』　平成19～21年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費・挑戦的萌芽研究「方言研究における構成的アプローチの構築」(No.19652941, 研究代表者：有元光彦）研究成果報告書
Chomsky, N. & M. Halle (1968) *The Sound Pattern of English*, Harper & Row.
藤本憲信 (2002)『熊本県菊池方言の文法』　熊本日日新聞情報文化センター
Kenstowicz, M. (1994) *Phonology in Generative Grammar*, Blackwell Publishers.
小林隆ほか (2008)『シリーズ方言学1　方言の形成』　岩波書店
九州方言学会編 (1991)『九州方言の基礎的研究　改訂版』　風間書房
Mohanan, K.P. (1986) *The Theory of Lexical Phonology*, D. Reidel Publishing Company.